

中学生の作文における 「主述の不具合」の出現状況

松崎 史周

1. はじめに

小・中学生の作文には、いわゆる「文のねじれ」が散見される。一般に文のねじれとは、文において主語と述語が対応していない現象のことを指し、主語と述語が対応していない文は「ねじれ文」と呼ばれる。文のねじれは、読みにくさや分かりにくさを引き起こす要因とされ、作文形式上の問題点に数えられるが、小・中学生が書く文章だけでなく、高校・大学生が書く文章にも見られ、学年が進行しても完全に解消されない傾向が見受けられる。

平成30年度全国学力・学習状況調査の中学校国語A問題（3年生対象）では、主語を明らかにしながら指定の語句を用いて文を作成する問題が出題されたが、正答率は22.8%と低く、「文の成分の順序や照応、構成を考えて適切な文を書くことに課題がある」と指摘された。

2 「心を打たれた。」を文末に用いた一文を書きなさい。なお、「心を打たれた」の主語を明らかにした上で、「誰（何）」の「どのようなこと」に「心を打たれた」のかが分かるように書くこと。

本問題では、正答の条件として、①「心を打たれた」の正しい意味を理解して書いていること、②「心を打たれた」の主語を明確にして書いていること、③「だれ（何）」のことに「心を打たれた」のかが分かるように書いていること、④「どのようなこと」に「心を打たれた」のかが分かるように書いていること、⑤一文で書いていることが挙げられているが、他の条件は満たしながらも、条件②を満たさずに不正解となった生徒が63.3%と多く、圧倒的に正答率を上回っている⁽¹⁾。主語を明示しながら述語と対応させて適切に表現することに課題のある生徒が多いということがわかる。

また、同年度の小学校国語A問題（6年生対象）においては、作文の中から主語と述語のつながりが合っていない文を選択し、正しく書き直す問題が出題されたが、正答率は35.8%と低く、「主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くことに課題がある」と指摘された。

【春休みの出来事の一部】

①ぼくは、校庭で野球の練習を毎日がんばりました。その努力は見事に実りました。②ぼくたちのチームは、地区大会で優勝したのです。③今年の春休みは、とてもじゅう実したもとなりました。でも、反省していることもあります。④反省点は、用具の手入れをあまりしませんでした。これからは、練習だけではなく、用具の手入れもしっかりがんばりたいと思います。

(問い)……部と——部とのつながりが合っていない文の番号を、①から④までの中から一つ選んで書きましょう。また、……部はそのままにして、文の意味が変わらないように、選んだ文を正しく書き直しましょう。

各文の主語と述語の対応を見ると、対応していない文は④となる。「ことです」を加えて文末を「しなかったことです」に直すこととなるが、主語と述語が対応した①～③の文を「主語と述語が対応していない文」として選んだ児童が43.1%にのぼり、正答率を上回る結果となった⁽²⁾。主語と述語の関係を適切に捉え、主語と述語を対応させて文を正すことに課題のある児童が多いということがわかる。

いずれも主語と述語の対応を問う問題であるが、小学6年生、中学3年生ともに、主語と述語を対応させて正しく文を書いたり書き直したりすることに課題があることが明らかになった。ただ、一口に「主語と述語の不对応」と言っても、その種類は様々であり、児童・生徒の作文においてどのように出現し、どのようなものが解消されにくいのかといったことは明らかになっていない。小学生の作文における出現状況については、松崎(2020)において調査・分析を行ったが、中学生を対象とした調査・分析は行っていない。そこで、本稿では中学1～3年生が書いた作文を対象として主語と述語の不具合を調査し、中学生の作文における主述の不具合の出現状況と傾向を明らかにしていくこととする⁽³⁾。

なお、主語と述語の不对応は、一般に「文のねじれ」「主述のねじれ」と呼ばれ、「誤用」として扱われるが、慣用的に使用されていて誤用と言い切れない場合もある。こうした事情を踏まえて、本稿では「主述の不具合」という用語を用い、主語と述語の関係になんらかの不具合が見られる文を対象としていく。

2. 児童・生徒の作文における主述の不具合の調査

戦後の国語教育では、昭和20年代後半から30年代にかけての「文法ブーム期」において、読解や作文に関連づけた機能的な文法指導が志向され、読解における文法指導、作文における文法指導が研究・実践された⁽⁴⁾。作文における文法指導は、文法的誤りの修正を通して文法を指導する「誤用文法」と、正しい表現、効果的

な表現ができるように実践的な観点で文法を指導する「表現文法」に分けられるが、現場の実践は誤用文法が中心であった。誤用文法の実践に際しては、学習者の実態把握を目的として作文の調査・分析が行われ、児童・生徒の作文に見られる文法的誤りが分類・整理された。

昭和30年前後の国語教育における文法的誤りの扱いを調査した松崎（2014）によると、文法的誤りは「主述関係」「修飾関係」「助詞の使い方」「接続の仕方」「その他」の5分野に大きく分類され、主述・修飾関係は「不照応」「重複」「脱落」、助詞の使い方は「誤用」「脱落」、接続の仕方は「乱用」「誤用」に整理されていたという⁽⁵⁾。戦中・戦後期に、文部省から発行された文法教科書『中等文法』に準拠した分類となっているが、学校文法を踏まえたものだけに、戦後の作文・文法指導で広く用いられた。

文法ブーム期以降は児童・生徒作文の調査も下火となり、文法的誤りの実態把握も散発的になっていったが、近年実施されたものとして伊坂（2012）（2013）が挙げられる。伊坂は小学校高学年から中学

表1 児童・生徒作文における主語と述語に関わる文法的不適格性

| | 小5 | 小6 | 中1 | 中2 | 中3 |
|--------------|-----|----|-----|-----|----|
| 文法的不適格の箇所の総数 | 239 | 86 | 151 | 155 | 55 |
| 主語・述語の不整合 | 8 | 5 | 13 | 10 | 7 |
| 主題に関わる不適格性 | 18 | 9 | 12 | 12 | 7 |

生の作文（1124編）を対象に文法的不適格性を調査し、「主語・述語の整合性」「理由表現の適格性」などに分類して考察を行っている。このうち、主語・述語に関わる文法的不適格性は、主語と述語の不对応に相当する「主語・述語の整合性」と、二重主題や助詞の選択、不要な主題など「主題に関わる表現の適格性」であるが、小学5年生から中学3年生にかけて表1のように出現しているという⁽⁶⁾。学年によって出現数は異なるものの、いずれの学年でも一定数出現しており、学年進行によって完全に解消されるとはいえない実態がある。

また、児童・生徒作文における主語と述語の不对応を調査・分析したものとして松崎（2015）（2020）が挙げられる。松崎（2015）は中学1年生が書いた作文86編（意見文33編・感想文53編）を対象にして主語と述語の不具合を調査し、

その特徴と傾向を分析したものであるが、主語と述語の不具合は文法ブーム期の分類に倣って、①「主語または述語の重複」、②「主語または述語の脱落」、③「主語助詞の誤用」、④「主語と

表2 中学1年生の作文における主語と述語の不具合

| | 出現数(率) | 出現作文数(率) |
|---------------|------------|---------------|
| 1. 主語または述語の重複 | 8 (7.4%) | 6 (7.0%) |
| 2. 主語または述語の脱落 | 8 (7.4%) | 7 (8.1%) |
| 3. 主語助詞の誤用 | 18 (16.7%) | 10 (11.6%) |
| 4. 主語と述語の不照応 | 74 (68.5%) | 38 (44.2%) |
| | 108 | 61/86 (70.9%) |

述語の不照応」に分類し、その出現数を表2のように示している。「主語と述語の不照応」の出現率が68.5%と突出して多く、調査作文の44.2%にのぼっている。主語と述語の不照応を文の種類から分類すると名詞述語文が最も多く、「主語と述語の不照応」74例のうちの53例と71.6%を占めている。また、主述の不具合全体のうち、名詞述語文は49.1%を占めており、名詞述語文における主語と述語の不照応が意見文・感想文に出現しやすいとしている⁽⁷⁾。

一方、松崎（2020）は小学2～6年生が書いた作文367編（「夢」をテーマとしたもの）を対象にして主語と述語の不具合を調査し、その特徴と傾向を分析したものである。主語と述語の不具合は松崎（2015）と同様に分類し、その出現数を表3のように示している。

表3 小学2～6年生の作文における主語と述語の不具合

| | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | |
|--------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|----------------|
| ① 主語と述語の不照応 | 53 (79.1%) | 85 (75.9%) | 125 (80.1%) | 78 (85.7%) | 69 (75.8%) | 410 (79.3%) |
| ② 主語または述語の重複 | 8 (11.9%) | 11 (9.8%) | 2 (1.3%) | 3 (3.3%) | 1 (1.1%) | 25 (4.8%) |
| ③ 主語または述語の脱落 | 1 (1.5%) | 4 (3.6%) | 12 (7.7%) | 1 (1.1%) | 12 (13.2%) | 30 (5.8%) |
| ④ 主語・主題助詞の誤用 | 5 (7.5%) | 12 (10.7%) | 17 (10.9%) | 9 (9.9%) | 9 (9.9%) | 52 (10.1%) |
| | 67 | 112 | 156 | 91 | 91 | 517 |

「主語と述語の不照応」の出現率が79.3%と突出して多く、各学年とも75～85%程度を占めている。また、主語と述語の不照応はその要因から「語句・形式選択の不備」「語句・形式の欠落」「文末不要」に分類し、その出現数を表4のように示している。

表4 小学2～6年生の作文における主語と述語の不照応の要因

| | 小2(67) | 小3(112) | 小4(156) | 小5(91) | 小6(91) |
|------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|
| 語句・形式選択の不備 | 14 (20.9%) | 14 (12.5%) | 25 (16.0%) | 10 (11.0%) | 22 (24.2%) |
| 語句・形式の欠落 | 33 (49.3%) | 62 (55.4%) | 87 (55.8%) | 54 (59.3%) | 39 (42.9%) |
| 文末不要 | 2 (3.0%) | 2 (1.8%) | 5 (3.2%) | 11 (12.1%) | 5 (5.5%) |
| 小計 | 49 (73.1%) | 78 (69.6%) | 117 (75.0%) | 75 (82.4%) | 66 (72.5%) |

語句・形式の欠落が最も多く、全体の 53.2% を占めている。「こと（である）」「から（である）」「（に）なること」の欠落が多いが、こうした語句・形式を述語に用いて主語と対応させることが児童にとって課題になっているとしている⁽⁸⁾。

以上、先行研究における児童・生徒作文の主述不具合の調査・分析について見てきたが、中学生の出現傾向はどのようなもので、小学生と比べてどのような特徴があるのだろうか。中学 1～3 年生の作文を対象とした主述の不具合の調査・分析を以下に見ていく。

3. 調査の対象と項目

調査対象の作文は、国立大学附属中学校 1 校 3 学年（1～3 年生）が「夢」という題のもとで書いたものである。時間は 45 分間で、字数の指定はなく、題目の提示以外、教師の指示や指導は一切なされていない⁽⁹⁾。なお、今回の調査では各学年 4 クラスのうち 2 クラスずつを抽出し、3 学年分で合計 235 編を対象としている。作文の文数・文字数とそれぞれの平均を学年ごとに示すと、表 5 のようになる。

表 5 調査対象の作文の概要

| | 中 1 | 中 2 | 中 3 |
|-------|-------|-------|-------|
| 作文数 | 79 | 79 | 77 |
| 文数 | 1188 | 1302 | 1223 |
| 平均文数 | 15.0 | 16.5 | 15.9 |
| 文字数 | 45097 | 39350 | 45383 |
| 平均文字数 | 570.9 | 498.1 | 589.3 |

調査に際しては、上記の作文をデータ化したコーパスを利用し、中学生の作文に見られる主述の不具合を松崎（2020）と同様の以下の基準に従って収集した。

- ① 「だれ（何）が」に当たる成分を「主語」、「どうする」「どんなだ」「何だ」「ある・ない」に当たる成分を「述語」とする。
- ② 主語と述語の認定は文節を単位とせず、構文上の働きから設定される文の成分を単位とする。
- ③ 主語と述語のうち主語を基準とし、その主語と述語が対応しているか見ていく⁽¹⁰⁾。
- ④ 「-が」に当たり、主体を表す成分を主語とし、対象を表す「-が」は主語としない。
- ⑤ 「-は」は格関係を確認し、主体を表さず、「-が」に直せない成分は主語としない。

- ⑥ 作文の場面や文脈から見て必ずしも誤用と言えない場合も、主語と述語の関係になんらかの不具合が見られれば収集する⁽¹¹⁾。

4. 調査の結果

調査対象の作文における主述の不具合を集計した結果、総数は75例となった。種類別に出現数とその割合を示すと、次の表6ようになる。なお、出現率は学年ごとに「種類別の出現数／出現総数」で算出している。

表6 中学生の作文における主述の不具合

| | 1年 | 2年 | 3年 | 計 |
|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| ① 主語と述語の不照応 | 23 (65.7%) | 10 (62.5%) | 17 (70.8%) | 50 (66.7%) |
| ② 主語または述語の重複 | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) |
| ③ 主語または述語の脱落 | 6 (17.1%) | 2 (12.5%) | 1 (4.2%) | 9 (12.0%) |
| ④ 主語・主題助詞の誤用 | 6 (17.1%) | 4 (25.0%) | 6 (25.0%) | 16 (21.3%) |
| | 35 | 16 | 24 | 75 |

主語と述語の不照応が多く、3学年全体で66.7%の出現率となっている。主語または述語の脱落は3年生で4.2%と他学年より少ないが、全体で12.0%の出現率となっている。主語・主題助詞の誤用は全体で21.3%の出現率となっており、主語と述語の不照応に次ぐ出現率となっているが、それでも主語と述語の不照応の出現率の1/3にも満たない。なお、主語または述語の重複は今回の調査対象では見られなかった。

各学年で主語・主題助詞の誤用や主語または述語の脱落が見られるものの、中学生の作文における主述の不具合の多くは主語と述語の不照応によるものである。小学生と同一の傾向が認められるが、主語と述語の対応を十分に図ることができず、作文において主述の不照応を引き起こしがちな生徒が一定数見受けられ、小学生と同様に中学生も主語と述語を対応させて文章を書くことに課題があることがわかる。

では、どのような主述の不具合が中学生の作文に見られるのか。種類別に文例を挙げ、出現状況と不具合の様相を見ていく。

① 主語と述語の不照応

主語と述語の不照応とは、主語または述語を構成する語句や形式の不備・欠落などによって主語と述語が対応しなくなったものである。いずれの学年でも出現

数が多く、1年生で65.7%、2年生で62.5%、3年生で70.8%の出現率となっている。3学年全体で66.7%の出現率は、小学生全体の出現率79.3%には及ばないものの、中学生作文に見られる主述の不具合のかなりの割合を占めており、中学生の作文においても主述の不具合の代表格となっている。

- (4) 私は昔、風邪をひきやすく度々小児科に連れていかれていました。(中3)
- (5) 高れい化が進んでいるということは、働く人が少なくなっています。(中1)
- (6) 私の小さな頃の夢は、ピアニストでした。(中3)

(4) は「連れていかれていました」が述語となるが、主語「私は」を踏まえると、使役の「せる」を加えて「連れていかされてきました」としたほうがよい。(5)は述語に形式の欠落があり、主語と対応しなくなっている。「ということです」を加え、「少なくなっているということです」にすべきである。また、(6)も述語に語句・形式の欠落が感じられる。「(に)なること」を加えて、「ピアニストになることでした」にしなければならない。

② 主語または述語の重複

同一の主語または述語が繰り返し出現することによって主語と述語が対応しなくなったものである。小学生全体の出現率も4.8%と少ないが、調査対象である中学生の作文には出現が見られなかった。参考までに小学生の例を挙げる。

- (7) ぼくは、はじめてのしあいでゴールを決めたのでぼくはとてもうれしかったです。(小2)
- (8) お父さんにこういわれました。「お前絵のさいのうあるなあ。」と言われました。(小5)

(7) は文の主語「ぼくは」が重複しており、後出の「ぼくは」が不要となる。(8)は倒置がなされており、引用部が後置されている。後置文は引用部のみで十分であるため、述語「言われました」は削除すべきである。

③ 主語または述語の脱落

文中の主語または述語と照應させるべき述語または主語に当たる成分が脱落していることによって主語と述語に不具合が生じているものである。1年生で6例(17.1%)、2年生で2例(12.5%)、3年生で1例(4.2%)となっており、全体で12.0%の出現率になっている。小学生も一部の学年(4・6年生)を除くと、いずれの学年も5例以下となっており、小・中学校ともに出現数は多くない。

- (9) もしも、私が将来小説家になったら、文章のかき方に工夫し、読者を「未知の世界」へひきこませるように、主人公の気持ちになれるように、風景を想像できる文章を書けるような小説家になりたいと思います。(中1)
- (10) 例えば、私が覚えている夢ではその頃、よくテレビでみていた「仮面ライダー」が出てきて、私がテレビの中で共演しているような夢。現実の友達が出てきて一緒に遊ぶ夢。(中3)

(9) は述語「なれるように」に対応する主語が脱落している。「読者が」などを補って主語と述語の対応を図り、接続詞「そして」などを用いて、「ように」で終わる2つの従属節が並列の構造になるようにするとよい。また、(10) は体言止めが用いられ、文全体の述語が脱落している。後続文が「その夢をみたときは…」と続くものの、述語の欠落感は拭えず、据わりの悪い文連続となっている。「私がテレビの中で共演しているような夢、現実の友達が出てきて一緒に遊ぶ夢」と並列し、「などがあります」などを補って、対応する述語を明示したほうがよい。

④ 主語・主題助詞の誤用

文脈及び文構成上の観点から見て主語・主題の助詞に誤りが見られ、主語と述語に不具合が生じているものである。1年生が6例で17.1%、2年生が4例で25.0%、3年生が6例で25.0%となっており、全体で21.3%の出現率となっている。小学生の出現率(10.1%)に比べると、高い出現率になっているが、出現数はいずれの学年も主語と述語の不照応の1/3～1/4程度に留まっている。

- (12) 医者・先生・保育士・スポーツ選手など職業とは数えきれないほどあります。(中3)
- (13) 私が、もしその夢がかなったら、その人に合った薬を研究していると思います。(中1)
- (14) 私がポップコーンを何個も落としたことがありました。(中1)

(12) は主語の助詞が誤っている。述語「あります」との対応を考えると、「とは」を「は」に変更すべきである。(13) は文末まで及ぶ主題助詞が誤っている。「が」を「は」に変更して、「私は」を文全体の主語としなくてはならない。また、(14) は主題を表す主語助詞が誤っている。主題「私」が前文から継続されているため、「が」を「は」に変更して「私は」とすべきである。

5. 中学生の作文における主語と述語の不照応の分析

作文に見られる主語と述語の不照応は、その要因から「語句・形式選択の不備」

「語句・形式の欠落」「文末不要」の3種類に分けられる。

語句・形式選択の不備とは、述語を構成する語句（実質語）や形式（機能語）の選択に不備があり、主語と述語が対応しなくなったものである。(15)は、主語となる「「看護師がたりない」ということが」を基準とすると、述語は「取り上げられていました」などとしなくてはならず、主語と対応する語句で述語が構成されていないために生じたものとなっている。なお、述語「耳に入った」を基準とするならば、主語を「「看護師がたりない」という言葉が」などとする必要がある。一方、(16)は、主語「私は」を踏まえると、述語は「連れていかされてきました」としなくてはならず、述語が主語と対応する形式になっていないために生じたものである。

- (15) 最近、テレビを見ていると、ニュースで「看護師がたりない」ということが耳に入った。(中2)
- (16) 私は昔、風邪をひきやすく度々小児科に連れていかれていました。(中3、(4)再掲)

語句・形式の欠落とは、述語に必要な語句や形式が欠落し、主語と述語が対応しなくなったものである。(17)・(18)はいずれも主語の内容を説明する名詞述語文であるが、(17)は述語を名詞化する「こと」と判定詞の「だ・である」が欠落し、(18)は職業名に後接する格助詞「に」と動詞「なる」、そして述語を名詞化する「こと」が欠落している。また、(19)は理由を説明する名詞述語文であり、述語を「あったからです」としなくてはならない。

- (17) 私の考える旅はまずどこかでゆっくりとする。(中2)
- (18) 私の将来の夢は薬剤師です。(中1)
- (19) ほくが人工衛星開発技術者になろうと思ったのは、人工衛星「はやぶさ」の存在です。(中1)

文末不要とは、文末で先行部の語句または内容を繰り返したり、文末に不要な語句を置いたりしたために、主語と述語が対応しなくなったものである。(20)は主語を構成する語句が述語でも繰り返されているため、主語と述語が対応しなくなっている。

- (20) きのうみたゆめは、なくなっていたかさがみつかたゆめをみました。(中2)

述語の語句または形式の不備による主述の不具合は以上の3つに分類できる

が、種類別に出現数とその割合を示すと、表7のようになる。

表7 述語の語句または形式の不備による主述の不照応

| | 1年(35) | 2年(16) | 3年(24) | 計(75) |
|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 語句・形式選択の不備 | 1 (2.9%) | 1 (6.3%) | 5 (20.8%) | 7 (9.3%) |
| 語句・形式の欠落 | 22 (62.9%) | 8 (50.0%) | 13 (54.2%) | 43 (57.3%) |
| 文末不要 | 0 (0.0%) | 1 (6.3%) | 0 (0.0%) | 1 (1.3%) |
| 小計 | 23 (65.7%) | 10 (62.5%) | 18 (75.0%) | 51 (68.0%) |

この結果からわかるように、不具合の要因として語句・形式の欠落が多く、中学生作文に見られる主述の不具合の57.3%を占めている。さらに、欠落している語句・形式を見てみると、(21)のように述語に「になること」が欠落したものが多く、特に将来の夢について書かれた作文の冒頭文(第一文)に多く見られる。自分の将来の夢について「私の将来の夢は薬剤師です。」のように「になること」を含めずに述べる例がよく見られるが、慣用的に使用されていることもあって、不具合と感じない生徒が見受けられる。話し言葉として場面上の前提が聞き手にも共有されている場合は問題ないが、場面に依存しない書き言葉では省略によって不具合が生じていると判断すべきだろう。本稿では書き言葉に分類される作文を対象としているため、主語と述語に不具合が見られると判断している⁽¹²⁾。

(21) 私の将来の夢は薬剤師です。(中1、(18)再掲)

→ 私の将来の夢は薬剤師になることです。

また、(22)のように、述語に「ことである」の欠落したものが一定数見られるが、形式名詞については、「こと」の他に「もの」「ところ」が欠落しているものもある。また、(23)のように、述語に「からである」が欠落したものもあるが、出現数は多くない。

(22) 私の考える旅はまずどこかでゆっくりとする。(中2、(17)再掲)

→ 私の考える旅はまずどこかでゆっくりとすることである。

(23) ほくが人工衛星開発技術者になろうと思ったのは、人工衛星「はやぶさ」の存在です。(中1、(19)再掲)

→ ほくが人工衛星開発技術者になろうと思ったのは、人工衛星「はやぶさ」の存在があったからです。

以上、述語の語句または形式の欠落による主述の不具合の代表的な例を見てきたが、これら3種類の出現状況は次のようになっている。

表8 述語の語句・形式の欠落の種類別出現数

| | 1年(35) | 2年(16) | 3年(24) | 計(75) |
|-----------|---------------|--------------|---------------|---------------|
| 語句・形式の欠落 | 22 (62.9%) | 8 (50.0%) | 12 (50.0%) | 42 (56.0%) |
| 「になること」欠落 | 11 (31.4%) | 6 (37.5%) | 4 (16.7%) | 21 (28.0%) |
| 「ことである」欠落 | 2 (5.7%) | 2 (12.5%) | 6 (25.0%) | 10 (13.3%) |
| 「からである」欠落 | 6 (17.1%) | 0 (0.0%) | 1 (4.2%) | 7 (9.3%) |

「になること」が欠落したものは、1年生が11例で31.4%、2年生が6例で37.5%、3年生が4例で16.7%となっており、3学年全体で28.0%の出現率となっている。語句・形式の欠落の中で最も高い出現率であるが、主述の不具合全体でも最も高い出現率となっている。小学生も29.0%と同様の出現率で、小・中学生とも主述の不具合の典型例となっている。

「ことである」が欠落したものは、1年生が2例で5.7%、2年生も2例で12.5%、3年生が6例で25.0%となっており、3学年全体で13.3%の出現率となっている。小学生の出現率4.6%と比べると、この種の主述の不具合が中学生になって増加していることがわかる。

「からである」が欠落したものは、1年生が6例で17.1%と多いが、3学年全体で7例、9.3%の出現率となっている。小学生の6.4%と比べると、2・3年生では出現率が低くなっているが、「なぜなら」などで書き出す理由文の不具合は一定数見られ、理由文全体の不具合が減少しているわけではない。

以上、中学生の作文における主述の不具合の出現状況について見てきたが、主語と述語の不照応の出現率が高く、その中でも名詞述語文における述語語句・形式の欠落によるものが多いことが明らかとなった。また、欠落している語句・形式としては、述語を名詞化する「こと」や判定詞の「だ・である」、端折られた「なる」「ある」などの動詞が挙げられるが、「ことである」「になること」が欠落した主述不具合文がまとまって出現していることも明らかとなった。この結果から、中学生はあらゆる文で主述の不具合を引き起こしているのではなく、もっぱら名詞述語文において主述の不具合を引き起こしており、主語に対応させて「こと」などを用いて適切に名詞述語文を構成するのが難しい生徒が一定数見られる

といった、小学生と同様の傾向が見られることがわかった。

6. 高校生・大学生の作文における主述の不具合

以上、中学生の作文における主述の不具合の出現状況について見てきたが、こうした傾向は高校生・大学生においても見られる。

高校生の作文における主述の不具合の出現傾向に関する先行研究は見当たらなかったが、高校生の作文に主述の不具合が見られることはたびたび指摘されている。授業実践を紹介しながら「国語表現」の指導計画と授業の進め方について述べた松崎（2005）は、「-ことは、～します」の形を取った主述の不具合が高校生の作文によく見られるとし、その例として次のような文を挙げている⁽¹³⁾。

- (24) ここで問題となることは、交通が渋滞する朝夕には、駅までバスで一時間もかかる。
- (25) バasketを始めたきっかけは、父親がやっていたこともあり、自然と興味を持ち中学へ入学したと同時に入部しました。

いずれも「ことである（です）」の欠落による主述の不具合であり、小・中学生と同様の出現傾向が認められる。

大学生の作文における主述の不具合の出現傾向を示したものとしては、百瀬（2021）が挙げられる。百瀬は「文章表現Ⅰ・Ⅱ」の授業において課したレポートを対象に作文の問題点を調査し、他の分野よりも文法の問題点の出現率が高く、その中でもねじれ文の出現率が21.2%と最も高くなっていると述べている。また、課題レポートに見られるねじれ文を松崎（2015）の分類に基づいて「重複」「脱落」「不照応」に分類し、次のように名詞節・名詞句を主語とした名詞述語文の述語が動詞述語になった誤りが最も多く見られたとしている。

- (26) 授業で学んで新しく気づいたことは、物の手順を書くときに見出しに番号を書く。
- (27) 軽いメモのようなものではない理由は、(中略)人によって解釈に違いが生じてしまう可能性がある。
- (28) 第8課で学んだことについて特に自分が感じたことは、(中略)余計に複雑にしてしまっていたなと感じた。

(26)は「ということである」、(27)は「からである」の欠落が、(28)は主語と述語の語句の重複が主述の不具合の要因である。本稿で「文末不要」に分類される(28)は、出現数は少ないものの、小・中学生の作文にも見られるものである。

大学生の作文においても小・中学生と同様の出現傾向が認められるが、書いた文を読み返せば誤りに気付ける「重複」「脱落」とは異なり、「不照応」の文については主語と照応した述語が選べるように訓練が必要であると指摘している⁽¹⁴⁾。

以上、高校生・大学生の作文における主述の不具合について見てきたが、出現数は減少するものの、小・中・高・大学生にわたって語句・形式の欠落による名詞述語文の主述不具合が見られることがわかった⁽¹⁵⁾。学年が上がっても完全に解消されず、児童・生徒・学生の作文に散見される結果となっている。他の種類の主述の不具合とは異なり、言語経験による文法習得によって自然に解消されるものとは言えず、国語科において主述の不具合の要因と修正の方法について学習の機会を設ける必要があるだろう。書き言葉の分析として認識・習得させていく必要があるが、修正の方法や正しい文型を教え込むのではなく、不具合のある文とない文を比較してどの部分に不具合があるか考えさせ、不具合のない文を参照しながら修正の方法を確認させるようにして、主語と述語の対応に関するメタ認知を育成していきたい。なお、学習者の実態を踏まえて主述の不具合を取り上げた文法の学習指導については機会を改めて論じていくこととする。

注

- (1) 国立教育政策研究所 (2018) 『平成 30 年度 全国学力・学習状況調査報告書 中学校国語』 pp.59-61
- (2) 国立教育政策研究所 (2018) 『平成 30 年度 全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語』 pp.37-39
- (3) 本調査は松崎 (2020) と同一の方法を用いて行うもので、分析の観点や手法も同一のものとなっている。
- (4) 山室和也 (2001) 「文法教育史研究 昭和 30 年代文法ブームの再検討」『札幌国際大学紀要』第 32 号 pp.223-229
- (5) 松崎史周 (2014) 「戦後作文・文法指導における「文法的誤り」の扱い」『目白大学人文学研究』第 10 号 pp.301-317
- (6) 伊坂淳一 (2012) 「中学生の日本語表現における文法的不適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第 60 巻 pp.63-71、伊坂淳一 (2013) 「小学校高学年児童の日本語表現における文法的不適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第 61 巻 pp.15-22
- (7) 松崎史周 (2015) 「中学生の作文に見られる「主述の不具合」の分析－出現傾向から学習者の表現特性を探る－」『解釈』第 61 巻第 5・6 月号 pp.12-20
- (8) 松崎史周 (2020) 「児童作文における「主述の不具合」の出現状況」『國文學論輯』第 42 号 pp.43-60
- (9) 本調査に使用した作文コーパスについては、宮城信・今田水穂 (2015) 『『児童・生徒

作文コーパス』の設計』『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.223-232
を参照のこと。

- (10) 主語を基準として述語との対応を見ていくため、主語の不備による主述の不具合という判定は必然的に少なくなる傾向がある。
- (11) 本稿では作文を調査対象としているため、主語と述語の対応も書き言葉の特質を踏まえて判断している。ここでいう書き言葉の特質とは、読み手が特定できないことも多いため、省略を控えて必要な情報を漏らさず書いたり、文法規則に従って書いたりすることを指す。
- (12) 自分の将来の夢について書いた作文の第一文目の場合、「夢」という題目から「将来の夢は何か」という問いが想起され、その問いの答えとして「職業名+「だ／である」」が挙がり、それがそのまま述語になったとも考えられる。こうした場面上的な文脈があることを理由として、「になること」が省略されていても問題ないと語用論的に判断する立場もあるが、本稿では、書き言葉の特質を踏まえて、こうした語用論的な判断は行わない。
- (13) 松崎史周 (2005) 「国語表現の指導計画と授業の進め方」『横浜国大國語教育研究』第23号 pp.50-66
- (14) 百瀬みのり (2021) 「『ねじれ文』改善に向けての4つのステップ-『文章表現Ⅰ・Ⅱ』の授業より-」『教職教育センタージャーナル』第7号 pp.1-15
- (15) 日本語学習者の作文における主述の不具合の出現傾向を示したものに、小口悠紀子・山田実樹 (2021) 「上級日本語学習者の作文に現れる「主述の対応関係の不具合」の実態-作文指導。学習の効率化を目指すための基礎研究」『日本語／日本語教育研究』[12] pp.181-196がある。小口・山田は「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」(通称 YNU コーパス) 収録の「七夕」をテーマに書かれた作文を対象に主述の対応関係の不具合を調査し、松崎 (2015) に従って留学生 60 名 (中国語母語話者 30 名。韓国語母語話者 30 名) の主述の不具合を分類・集計している。その結果として、主述の対応関係の不具合のうち、主語と述語の不照応が最も多く、出現率も 66% にのぼっているとしている。また、主語と述語の不照応の中で述語語句の不備によるものが最も多く、43% の出現率となっているとしている。不具合の例として、「ことです」「ということだ」が欠落した文が挙げられているが、いずれも中国語母語話者で、韓国語母語話者の作文にはこの種の名詞文における主述不具合は見られなかったという。韓国語には日本語の形式名詞「こと」と類似の機能を持つ形式が存在するが、中国語には存在しないことがその要因として指摘されている。中国語母語話者に関しては、日本人小・中学生と同様の出現傾向が認められるが、不具合が生じる要因については日本語母語話者と異なる可能性が示唆されたとしている。

[付記]

本研究は JSPS 科研費 JP20K02800 の助成を受けている。